

## 5) 「動物の神学」の形成

- \* 動物の「魂」や「権利」をめぐる議論の蓄積 【理論】
- \* 西洋キリスト教では、伝統的に魂は人間の専有物として考えられることが多かった。
- \* 動物の「魂」をめぐる議論の歴史は長い。
- \* 池上俊一『動物裁判』（講談社現代新書）1990年。
- \* 金森修『動物に魂はあるのか』（中公新書）2012年。
- \* 動物のための礼拝（1970年代以降） 【実践】



St. Francis Church, Hoboken, NJ

## 前史（1）

- \* 聖書的動物観の一例

\* 人間に臨むことは動物にも臨み、これも死に、あれも死ぬ。同じ霊を持っているにすぎず、人間は動物に何らまさるところはない。すべては空しく、すべてはひとつのところに行く。すべては塵から成った。すべては塵に返る。人間の霊は上に昇り、動物の霊は地の下に降ると誰が言えよう。  
(コヘレトの言葉3:19-21)

## 前史（2）

- \* 同じキリスト教であっても、西方世界と東方世界とでは、動物観に大きな違いがある。
- \* 【参考】ドストエフスキー『カラマゾフの兄弟』（原著1880年）におけるゾシマ長老の言葉
- \* 兄弟よ、人々の罪過を恐るる勿れ。罪過のただ中にある人間を愛せよ。なぜなれば、これはすでに神の愛にあやかるものであって、地上における愛の頂上にほかならぬからである。ありとあらゆる神の創造物を、全体としても、はたまた各部分としても、なべて等しく愛するがよい。一枚の木の葉、一条の日の光をも、もれなく愛するがよい。動物を愛せよ。植物を愛せよ。ありとあらゆる物象を愛せよ。一切の事物に愛をそそぐならば、そこに神の秘密を発見するにいたる。(続く)

而して、ひとたびこれを発見したからには、もはやその後は毎日、毎時、毎分、いよいよますます、たえずその認識を深めるようになるであろう。かくてついに、完全無欠な、全世界全人類的爱によって、この世を光被するにいたる。動物を愛せよ。かれらには神が思想の源と、平安なる喜びとを与え給うたのである。かれらを憤激に駆り立てる勿れ。苦しめてはならぬ。かれらから喜びをうばいとはいけない。神の心に抗してはならぬ。人間は動物の上に立って、傲然と構えるべきものではない。かれらはすべて罪過なき存在であるが、これに反してわれわれ人間は、偉大な稟体を具備しつつも、おのが出現によって大地を腐敗させ、その腐爛せる足跡を、あとにのこしてゆくのである。ああ、嘆かわしいかな！ われわれはほとんど各人みな然りである！

## 前史（3）

- \* 動物愛護運動の先駆者
- \* 1824年、アーサー・ブルーム（英国国教会の司祭）が王立動物虐待防止協会（The Royal Society for the Prevention of Cruelty to Animals）を設立。キリスト教の慈愛の精神が、動物にまで拡充されることを願った。

## 「動物の神学」の一例

- \* 「我々が動物にたいして義務をもっているという道徳的には満足すべき解釈は、ある動物解放主義者によって勧められているような、動物をも同等に考えるべきであるという主張に単に留まってはられないのである。イエスの人格によって示されている神的愛という考えに基づいて私は次のように提案する。すなわち、弱者と無防備なものは同等なのではなく、より大きな考慮を与えられるべきである、と。弱者が道徳的優先権を持つべきなのである」（A.リンゼイ『神は何のために動物を使ったか—動物の権利の神学』64頁）。

## 日本の場合——動物供養



## 動物と人間の共生から その崩壊の時代へ

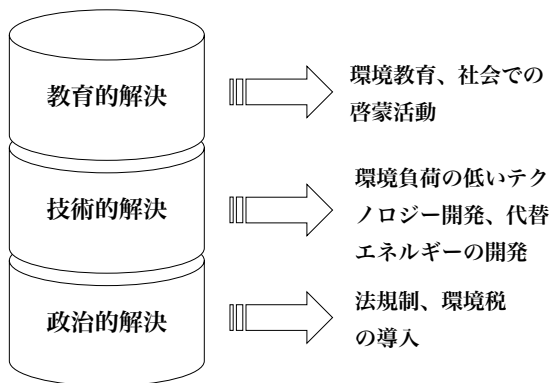
- \* 日本には、動物と人間の共生を語る昔話が多数存在する（特にアイヌの神話）。人間と動物は会話をし、結婚し、仲間となる。人間が動物を犠牲にしなければ生きていないことに対する痛みと感謝をおぼえる回路を、かつては持っていた。
- \* 技術力の進展による、動物と人間の「対称性」の崩壊、そして動物の家畜化。

## 6) 米国・福音派における 環境意識の向上

- \* 福音派（Evangelicals）とは何か？
  - \* 中絶、同性愛問題への取り組みを共有する宗教保守勢力
- \* 福音派の従来の態度
  - \* 強い終末意識（千年王国思想）のため、環境問題には、まったく関心を示さなかった。
- \* 近年の急速な変化
  - \* 環境問題、貧困問題などグローバルな課題への取り組みを始めている。

## 4. 環境倫理をめぐる 課題と展望

## 1) 様々な日常的取り組みの必要性



## 2) 自然の生存権への視座

\* 動物・自然物の権利の拡張

\* 新たな自然理解とアニミズムの違いは？

\* アウグスティヌス「動物を殺し、植物を減らすのを差し控えることは迷信の極みだと、キリスト自身が教えている。なぜなら、われわれと獣と木のあいだには何ら共通する権利がないものと判断したので、かれは悪霊どもを豚の群の中に入り込ませたのであり、また実を結ばないでいる木を呪って枯らしたのである」

## 3) アニミズムの復権という ディスコースに対する批判的洞察

\* 日本のアニミズムや多神教的考えによって問題解決できるという言説は、ほとんどの場合、歴史の実証性を欠いた文化ナショナリズムに過ぎない。

\* アニミズム的世界観が前提としている自然や動物への「畏怖」を、どのようにして回復するのか。

\* 手がかりとしての「生物多様性」 (biodiversity)

## 4) 世代間倫理 (未来世代への倫理) の形成

\* 世代間の生命ネットワークの構築

\* 先祖祭祀の再解釈

\* 「近代化」によって失われた次元への洞察

\* 3.11からの問いかけ